

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2012～2014

課題番号：24242021

研究課題名(和文) 第一次世界大戦と現代世界の変貌についての総合的研究

研究課題名(英文) A Trans-disciplinary Study of the First World War

研究代表者

山室 信一 (Yamamuro, Shin'ichi)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：10114703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第一次世界大戦を、単なるヨーロッパ列強の戦争ではなく「世界戦争」として、戦闘員のみならず非戦闘員までを当事者とし、その日常生活や知性・感性のありようまで根底から揺るがした「総力戦」として、必ずしも1918年11月に終結せず、その後の世界の歩みを根底的に規定しつづける「未完の戦争」として捉え、現代世界の基礎を据えた「起点」の歴史的意味を多様な視点から明らかにした。本研究の成果である論集や単行本シリーズは、依然としてヨーロッパ中心主義的な欧米における第一次世界大戦像に代わりうる全体像を提示した点で大きな学術的意義を有し、今後の必読文献となるであろう。

研究成果の概要(英文)：This research project has suggested three basic perspectives for the study of the First World War. The first is globality, which does not only mean that there were hostilities throughout the world but also means that the war brought about a global transformation. The second is totality, which means that the war provoked profound and radical changes in the lifestyles, ways of thinking, feelings and even unconsciousness. The third is continuity, which means that we are still bound by the world created by the war. The project has made it clear that the First World War has to be understood to be the defining event of the modern world. The publications of the project have presented an alternative image of the war to that is more or less informed by Euro-centrism, which is still influential among the First World War studies in Europe and America. They will certainly be regarded as essential readings for the students of the First World War.

研究分野：法制史

キーワード：第一次大戦 総力戦 世界性 芸術 20世紀 現代

### 1. 研究開始当初の背景

第一次大戦を契機として、戦争のグローバル化、科学・産業界までも巻き込んだ総力戦の浸透の中で科学技術崇拜は進み、技術開発競争は激化する。他方で「西洋の没落」が叫ばれ、理性への不信や教養文化の貶下も進行した。さらに国際連盟下において戦争犯罪概念が生まれるなど、現在でもわれわれは第一次大戦がもたらした衝撃の只中にいる。欧米においては、(第二次大戦ではなく)第一次大戦こそを本来の20世紀の起点と位置づけ、個々の研究者にはその総体をフォローすることも困難なほど膨大な研究成果が送り出し続けられてきた。しかるに、日本における第一次大戦研究の蓄積は、日露戦争や第二次世界大戦のそれと比べて貧弱であり、同時代の日本とその植民地に及ぼしたインパクトも、「現代世界」に対するその歴史的な意義も、十分に認識されているとは言い難かった。

### 2. 研究の目的

欧米においてさえも、戦争自体についての研究は大量にあるにせよ、必ずしも大戦の「世界性」および「持続性」について十全に明らかにされてきたとは言えなかった。例えば第一次大戦を視察した日本の軍人が「総力戦/持続戦(永久戦)」というビジョンを膨らませていき、それがやがてアジア・太平洋戦争に至るとか、この「永久戦争」のビジョンとは逆に「恒久平和」が模索されるようになって、第一次大戦後の国際連盟の成立になるといった、現代にまで至る事後的かつグローバルなインパクトを視野に入れない限り、ヨーロッパ国内戦争を超えた世界戦争としての第一次大戦の意味は見えてこない。本研究は、第一次大戦のこうした人類史的意義を問い直し、また「第一次大戦の世界戦争たる所以」を、非西欧(=日本/アジア)の視点を導入することによって明らかにしようとするものであった。

### 3. 研究の方法

本研究は、第一次大戦についての網羅的調査を目指すものではない。ここで求められるのは現象面における歴史事実の網羅ではなく、むしろ的確な主題設定を行なうことにより、上述の「世界性・総体性・持続性」のシステムそのものを問うことにあった。従って本研究においては、以下の三点の分析に重点が置かれることになった。

(1) 世界性：日本/東アジアにおける日英米中露の関係を事例として、第一次大戦が惹き起こした国際関係のシステム変化を解明する。ここで主題となるのは、戦争を通して出現した世界の一体化であり、世界の一体化がさらに戦争の世界化を促すというプロセスである。

(2) 総体性：いうまでもなく第一次大戦は、

政治経済、科学技術、マンパワー、文化芸術など、すべての資源を戦争に動員する20世紀的な国家システムの最初の実験場であった。本研究における対象分野は、徴兵制度などの軍事制度はもちろん、芸術(音楽・絵画・文学)ならびに生活(食糧・国債・医療)にも及ぶ。その目的は、一見遠く離れて見える諸現象の背後に、「動員」という新しい社会システムの誕生を見出すことであった。

(3) 持続性：第一次大戦の戦後処理は、結果的に無数の未決の諸問題を抱え込むことになる。例えば19世紀のナショナリズムが大戦の悲劇を引き起こしたという反省を多くの人が共有していたにもかかわらず、ヴェルサイユ条約はある意味でそれと矛盾した民族自決を謳い、確かにそれは国際連盟による恒久平和の希求へとつながった反面、過激なナショナリズムを増幅する契機となって、それが第二次大戦の遠因ともなった。こうした民族問題と国際平和の構築の矛盾を事例としつつ、「終わりきらなかった戦争」「第二次世界大戦へと続いていく戦争」として、戦間期との連続性の中に大戦を位置づける。

### 4. 研究成果

(1) 人文書院より『レクチャーシリーズ 第一次大戦を考える』全12巻を刊行した。このシリーズの執筆者のほぼすべてが本科研プロジェクトに加わっており、高校/大学の授業でも十分使用可能な平易さと学術研究の最先端の知見との総合を目的とした。本シリーズのほぼすべての著作が、新聞雑誌等の書評の対象となっている。

(2) 岩波書店より『現代の起点 第一次世界大戦』全四巻を刊行した。このシリーズの執筆者の多くも本科研のプロジェクトに加わっており、実質的に本科研の報告書ともいえる。朝日新聞をはじめとする新聞雑誌で大きく書評として取り上げられ、全巻が再版された。本シリーズのキーワードは「総体性・現代性・持続性」である。

(3) ベルリン自由大学の International Encyclopedia of the First World War 1914-18 プロジェクトに協力した。これはEUのサポートを受けつつ、従来の戦史中心/ヨーロッパ中心/ナショナル・ヒストリー中心の第一次大戦観を克服すべく、第一次大戦における「世界性」に焦点を当てた総合研究を目指す壮大な計画であり、ヨーロッパ諸国はもとより、トルコ、アメリカ、中国、等から多くの国際的研究者が参加するそのエディトリアル・ボードには、研究代表者の山室も名を連ねている

(<http://www.1914-1918-online.net/>)。プロジェクトリーダーのOliver Janz氏は、申請者が2014年1月12・13日に京都大学で行った国際ワークショップ「第一次世界大戦再

考：100年後の日本で考える」の招待講演者の一人であり、その際に氏の International Encyclopedia of the First World War 1914-18 と京都大学人文科学研究所の間の提携契約を既に交わしている。

(4) 2014年1月12・13日に京都大学において、国際ワークショップ「第一次世界大戦再考：100年後の日本で考える」を開催した。本ワークショップにはジェイ・ウィンター(エール大学)、オリヴァー・ヤンツ(ベルリン自由大学)、ジョン・ホーン(ダブリン大学)、アネッテ・ベッケル(パリ第十大学)、ゲルハルト・ヒルシュフェルト(シュトゥットガルト大学)という、この20年の欧米における第一次大戦をリードしてきた研究者五名を招待し、山室信一とともに講演討議を行った。その内容は岩波書店の『思想』2014年10月号に収録されている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計21件)

奈良岡 聡智、解題、滞英偶感、査読有、1巻、2015、1-10  
DOI:なし

山室 信一、東アジア史における第一次世界大戦、思想、査読有、1086巻、2014、7-32  
DOI:なし

山室 信一、世界戦争への道、そして「現代」への胎動、第一次世界大戦、査読有、1巻、2014、1-30  
DOI:なし

藤原 辰史、戦争を生きる、第一次世界大戦、査読有、2巻、2014、3-20  
DOI:なし

小関 隆、西部戦線のアイルランド・ナショナリスト - 戦場の共有は和解の契機たりうるか?、第一次世界大戦、査読有、2巻、2014、31-54  
DOI:なし

藤原 辰史、食糧生産を支える女性たち - 「農村婦人」の動員、第一次世界大戦、査読有、2巻、2014、241-263  
DOI:なし

岡田 暁生、「芸術」の崩壊と大衆文化、第一次世界大戦、査読有、3巻、2014、3-30  
DOI:なし

岡田 暁生、第一次世界大戦と演奏会文

化の変質 - 音楽国有化の思想ならびに慈善コンサートを中心に、第一次世界大戦、査読有、3巻、2014、31-54  
DOI:なし

小関 隆、未完の戦争、第一次世界大戦、査読有、4巻、2014、3-32  
DOI:なし

小関 隆、「自決」と報復 - 「戦後の戦争」としてのアイルランド独立戦争、第一次世界大戦、査読有、4巻、2014、33-52  
DOI:なし

藤原 辰史、暴力の行方 革命、義勇軍、ナチズムのはざままで、第一次世界大戦、査読有、4巻、2014、53-78  
DOI:なし

山室 信一、世界認識の転換と「世界内戦」の到来、第一次世界大戦、査読有、4巻、2014、79-104  
DOI:なし

山室 信一、世界性・総体性・現代性をめぐって - 振り返る明日へ、第一次世界大戦、査読有、4巻、2014、247-275  
DOI:なし

[学会発表](計11件)

藤原 辰史、ナチスのキッチン 来たるべき台所のために、スポーツ社会学実行委員会企画講演(招待講演)、2014年3月21日、北海道大学

藤原 辰史、食の公共空間 「ナチスのキッチン」と公共性、大阪大学国際公共政策研究科稲森財団寄附講座(招待講演)、2014年2月1日、大阪大学大学院国際公共政策研究科

藤原 辰史、ナチスのキッチン 来たるべき台所のために、西南学院大学公開講座「人は何を食べるのか～食をめぐる社会と文化～(招待講演)、2013年11月19日、西南学院大学

藤原 辰史、ナチスの収穫感謝祭 精霊、ラジオ、政治、関学西洋史学研究会年次大会シンポジウム「近現代ヨーロッパ農村の習俗と政治」(招待講演)、2013年10月8日、関西学院大学

藤原 辰史、台所の設計史 『ナチスのキッチン』をめぐって、武庫川女子大学生活デザイン研究会(招待講演)、2013年11月19日、武庫川女子大学

藤原 辰史、第一次世界大戦の共同研究、比較研究の愉しみ 国立大学附置研究所・センター長会議 第三部会シンポジウム(招待講演) 2013年10月4日、北海道大学スラブ研究センター

小関 隆、第一次世界大戦再考、日本西洋史学会第63回大会、2013年5月12日、京都大学

山室 信一、東アジアにおける近代の多元性について 空間学知と連鎖視点から、台湾大学人文社会高等研究院・台湾中文学会(招待講演) 2012年12月14日、台湾大学(中華民国)

山室 信一、「世界」性と「近・現代」性の踊り場 第0次世界大戦の「戦後」と第1次世界大戦の「前夜」における東アジア、第37回社会思想史学会大会(招待講演) 2012年10月26日、一橋大学

久保 昭博、Raymond Queneau ou les vertus democratiques du roman parlant, Colloque international processus de democratisation et moment vernaculaire des litteratures, 2012年10月25日、パリ第四大学(ソルボンヌ・フランス)

〔図書〕(計26件)

山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史、岩波書店、第一次世界大戦1 世界戦争、2014、256

山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史、岩波書店、第一次世界大戦2 総力戦、2014、267

山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史、岩波書店、第一次世界大戦3 精神の変容、2014、278

山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史、岩波書店、第一次世界大戦4 遺産、2014、275

坂本優一郎、名古屋大学出版会、投資社会の勃興、2015、496

中野耕太郎、名古屋大学出版会、20世紀アメリカ国民秩序の形成、2015、408

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山室 信一(YAMAMURO, Shin'ichi)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：10114703

(2) 研究分担者

岡田 暁生(OKADA, Akeo)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：70243136

小関 隆(KOSEKI, Takashi)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：10240748

王寺 賢太(OUJI, Kenta)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：90402809

伊藤 順二(ITO, Junji)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：80381705

籠谷 直人(KAGOTANI, Naoto)  
京都大学・人文科学研究所・教授  
研究者番号：70185734

高木 博志(TAKAGI, Hiroshi)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号：30202148

奈良岡 聰智(NARAOKA, Souchi)  
京都大学・法学研究科・教授  
研究者番号：90378505

田辺 明生(TANABE, Akio)  
京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究

科・教授

研究者番号：3 0 2 6 2 2 1 5

藤原 辰史 (FUJIHARA, Tatsushi)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：0 0 3 6 2 4 0 0

坂本 優一郎 (SAKAMOTO, Yuichiro)

大阪経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：4 0 3 3 5 2 3 7

鈴木 董 (SUZUKI, Tadashi)

東京大学・東洋文化研究所・名誉教授

研究者番号：5 0 1 6 2 9 6 2

中野 耕太郎 (NAKANO, Kotaro)

大阪大学・文学研究科・准教授

研究者番号：0 0 2 6 4 7 8 9

早瀬 晋三 (HAYASE, Shinzo)

大阪市立大学・文学研究科・教授

研究者番号：2 0 1 8 3 9 1 5

河本 真理 (KOUMOTO, Mari)

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：1 0 4 5 4 5 3 9

服部 伸 (HATTORI, Osamu)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：4 0 2 3 8 0 2 7

津田 博司 (TSUDA, Hiroshi)

筑波大学・人文社会科学研究科(系)・助教

研究者番号：3 0 5 9 9 3 8 7

小野 容照 (ONO, Yasuteru)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：0 0 7 0 5 4 3 6

藤井 俊之 (FUJII, Toshiyuki)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：3 0 6 3 6 7 9 1

小野寺 史郎 (ONODERA, Shiro)

埼玉大学・教養学部・准教授

研究者番号：4 0 5 1 1 6 8 9

久保昭博 (KUBO, Akihiro)

関西学院大学・文学部・准教授

研究者番号：6 0 4 3 2 3 2 4

黒岩 康博 (KUROIWA, Yasuhiro)

天理大学・文学部・講師

研究者番号：6 0 5 2 3 0 6 6

小川 佐和子 (OGAWA, Sawako)

京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：9 0 7 0 5 4 3 5

(3)連携研究者

( )

研究者番号：